

上越交響楽団

第57回定期演奏会

■日時…2005年9月18日(日)

開場13:30/開演14:00

■会場…上越文化会館大ホール

■指揮…吉井 俊哉 ■客演コンサートマスター…三溝 健一

■主催…上越交響楽団

Brahms

1833~1897

Mendelssohn

1809~1847

Tchaikovsky

1840~1893



Joetsu symphony orchestra

上越交響楽団

団 長

古海法雲

本日は上越交響楽団の定期演奏会にお越し下さいましてまことにありがとうございます。

本年からは三溝健一先生にトレーナーとして来ていただいております。

また今回は客演コンサートマスターとしても演奏に加わっていただきました。

先生は曲想に沿って一つ一つの音がしっかりと奏できるように指導して下さいます。

団員たちは初見の楽譜を見れば直に演奏できる力を持っています。

しかし、それよりも練習を積み重ねることによって

曲の深みがどんどん理解できるようになります。

先生の指導により、新たな発見をしながら練習に参加することが楽しみにもなりました。

本日は楽聖たちの深くて美しくて力強い曲をどうぞお楽しみください。



常任指揮者 吉井 俊哉 [Toshiya Yoshii]

1959年高田市（現上越市）に生まれる。

小学校では鼓笛隊でトランペットを吹き、城南中学校では吹奏楽部でチューバを吹き部長を務める。

高田高等学校に進学し器楽部入部するとともに上越交響楽団に入団。

1978年明治大学工学部建築学科入学。

青山学院大学管弦楽団に団友として参加するとともに、上越交響楽団での活動を続ける。

明治大学を卒業後、上越市に建築技師として採用され市役所に勤務する。1級建築士、建築基準適合判定資格者の肩書きを持つ。

2002年上越市および韓国浦項市で開催された日韓フレンドシップコンサートにおいて、栗山和樹作曲「ソロパーカッションとオーケストラのための「青邸の美しい庭」」の指揮を務める。

以降も常任指揮者として上越交響楽団の指導にあたり、2004年に上越市で再び開催された日韓フレンドシップコンサートの指揮を担当し好評を博す。



客演コンサートマスター 三溝 健一 [Ken-ichi Samizo]

長野県出身。4歳よりヴァイオリンを始め、正岡紘子、天満敦子、山岡耕彦の各氏に師事。

1985年、東京音楽大学入学、井上將興氏よりヴァイオリンおよび室内楽を学ぶ。

この間肥沼きよ、竹内邦光、松本紀久雄、丸山嘉夫の各氏に師事、ピアノ、ソルフェージュ、指揮法、音楽学を学ぶ。

1986年、井上將興氏と共に弦楽オーケストラ「アンサンブル藝弦」を設立、1987年のデビュー公演以来首席第2ヴァイオリニストを務める傍らオーガナイザー、プロデューサーとしても活躍、アメリカ公演を成功させる。

1992年には「室内楽“EAU”（おう）」を設立し、首席ヴァイオリニストとして代表的な室内楽作品の演奏はもとより、委嘱作品の初演にも意欲的に取り組む。

また、1999年に発足した「音泉室内合奏団」ではコンサートマスターと音楽監督を兼任、そのレパートリーは小編成の室内楽曲から交響曲にまで及ぶ。

ソロの分野では「ブルッフのヴァイオリン協奏曲」、天満敦子氏と共演の「バッハの2つのヴァイオリンのための協奏曲」、リムスキー＝コルサコフの交響組曲「シェエラザード」でのソロ等が記憶に新しい。

一方、「足立シティオーケストラ」「松本交響楽団」「柏崎フィルハーモニー管弦楽団」をはじめ数多くのオーケストラにおいて常任、客演コンサートマスター、あるいはソロ・コンサートマスターとして活躍、そして本演奏会より本団の客演コンサートマスターを務めるなど、市民オーケストラの発展に力を注ぎ初心者や社会人から音楽家志望の受験生まで幅広く後進の育成にもあたる。

“Scuola di Violino” 講師。池袋音楽学院講師。

Program & Explanation

●プログラム ●曲目解説

フェリックス・メンデルスゾーン 序曲「フィンガルの洞窟」 作品26

Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy
Overture "Fingal's cave" Op.26

メンデルスゾーンは1829年4月、初めてイギリスへ旅行し半年あまり滞在して、指揮者、鍵盤楽器奏者として活躍し、多忙な毎日を送った。それでも8月にはスコットランドへの小旅行を計画、同地西部にあるヘブリディス諸島のひとつ、スタッフファ島のフィンガルの洞窟を訪れた。これは海蝕によって作られた巨大な岩窟であり、奇景をもって知られている。これに強い感銘を受けたメンデルスゾーンはたちまち案想が湧き、家への手紙にこの序曲の最初の主題を書いて送った。自宅に帰ってから印象を尋ねられた時「口では巧く言えないが、音楽にするとこのような感じた。」と言ってピアノに向かい、未完の曲を弾いたという。後にワーグナーがこの曲を聴き「第一流の風景画家である。」と激賞したように、音楽に耳を傾けているとフィンガルの洞窟の奇景が眼前に浮かぶようである。



ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー イタリア奇想曲 作品45

Peter Ilyich Tchaikovsky
Capriccio Italien Op.45

1878年の暮れにモスクワ音楽院教授を辞め、ある程度時間のできたチャイコフスキーは各地に旅行するようになった。この曲は、1879年の暮れに弟モテストとともにベルリン・パリを経てローマに旅した時に、イタリアの印象をスケッチしたものである。曲は、奇想曲の名のとおり、特定の形式に拘束されない自由なもので、チャイコフスキーがローマで知ったイタリアの旋律のいくつかを巧みに配列している。導入部はローマに滞在中、ホテル前庭のイタリア騎兵隊の宿舎から毎日聞こえてきたというファンファーレである。途中、管楽器で奏される8分の6拍子の明るいメロディーは、イタリア民謡「美しい娘」に基づいている。そして曲はタンバリンの奏するタランテラのリズムで、明るく高らかに力強く終わる。暗く、重々しい作品が多いチャイコフスキーの曲の中で、最も明るく楽しい雰囲気を持った曲といえる。



休憩

ヨハネス・ブラームス 交響曲第4番 ホ短調 作品98

Johannes Brahms
Symphonie Nr.4 E-moll, Op.98



ブラームスの最後の交響曲である第4番は、第3交響曲完成の翌年1884年6月から作曲が始められた作品で、作曲者51才から翌年にかけての作である。ブラームスはかつて最愛の父と共に旅行を楽しんだこともある思い出の地、ウィーン西南シュティリア地方の避暑地ミュルツツ-シュラクに別荘を借り、創作に専念している。同年夏には、早くも第1楽章と第2楽章を書き上げ、友人のエリーザベト・ヘルツォーゲンベルク夫人に送り、さらに彼女を介してクララ・シューマンにも見せている。そして翌年の夏には第3、第4楽章を作曲するなど、創作の筆は順調に進んだようだ。なお作曲中に、隣家で火事があり、その勢いはブラームス宅にまで及ぶほどだったが、ブラームスは机に草稿を残したまま消火活動に協力、楽譜は友人が煙の中からかるうじて持ち出したと言うエピソードも伝えられている。

既に当代随一の作曲家として名声も高かった彼ではあるが、意外にもこの新しい交響曲がどのように受け入れられるか心配ではなかったようである。また演奏には万全のリハーサルを必要とすると判断、友人ハンス・フォン・ビューローが指揮者を務めていたマイニンゲンの宮廷管弦楽団で初演することを計画し、予定よりも早めにマイニンゲン入りしてビューローと綿密なリハーサルを重ねている。

ブラームスはこの曲の完成後、さらに12年の歳月を生きているから、これが決して最晩年の作品と言う訳ではないが、作品は何故か回顧的であり、人生の秋を思わせる風情をたたえている。技法的には、まさに円熟を究めた巨匠の手になる豊かさを誇るが、バロック音楽やそれ以前の音楽によった特徴もあり、第2楽章の主題には古い教会旋法のひとつフリギア旋法が用いられているし、終楽章はバロック時代の変奏曲の形式パッサカリアにより構成されている。しかもその主題はバッハのカンタータ第150番「主よ、我汝を仰ぎ望む」の主題が採用されるなどバッハへの接近も見せている。

第1楽章:アレグロ・ノン・トロppo ホ短調 2/2拍子

第2楽章:アンダンテ・モテラート ホ長調 6/8拍子

第3楽章:アレグロ・ジョコーソ ハ長調 2/4拍子

第4楽章:アレグロ・エネルジーコ・エ・パッションアタ ホ短調 3/4拍子